

# “すばらしきみえ”

FOR NICE COMMUNICATION

2018.6  
204号

■特集／笑顔が集う、三重の地域交流拠点

●いま、グループネット／三重県シェアリングネイチャー協会 ●みえを歩こう／津市 一身田町





特集

# 笑顔が集う、三重の地域交流拠点

暑い日も寒い日も、毎日通った小学校。夕暮れまで、友人と遊んだ空き地や町並み。家族と一緒に食事した大衆食堂…。私たちの誰もが、ふとした瞬間に懐かしく思い出す建物や風景があるので、はないでしょうか。

地域の町並みに欠かせない存在だった建物の中には、残念ながら、その姿を消してしまうものもあります。近年、こうした建物を再び蘇らせ、地域の交流や活性化の拠点として活用しようという試みが始まっています。

今回は、新たに地域交流拠点として再生した施設を5か所ご紹介します。そこでは、多くの笑顔と心尽くしのもてなしに出会えるでしょう。

※各施設で開催される教室やイベントなどの予約方法・人数・日時・料金などは、それぞれ異なりますので、事前に必ずご確認ください。

取材・文…中村真由美

撮影……梅川紀彦・尾之内孝昭

ただし※印の写真は取材先から提供していただきました



かつての小学校校舎で、新たな交流のひととき

# 桐林館 阿下喜美術室

(旧阿下喜小学校職員室)

【いなへ市北勢町】



かつての職員室の面影を残す「桐林館 阿下喜美術室」

(1981)

年の小学校  
移転にとも  
ない、規模  
を縮小して  
現在地に移  
築されました。以来、  
文化資料保  
存施設「桐  
林館」とし  
ての役割を  
果たしてい  
ますが、昭和初期の小学校建築物として貴重な存在であることなどから、平成26年に、門や石柵と合わせて、国登録有形文化財となりました。



「桐林館」外観

「まあ、懐かしいわねえ」「何十年も昔に戻ったみたい」「いいわねえ」...

北勢町阿下喜に昨年オープンした、ギャラリーと喫茶室を兼ねた「桐林館 阿下喜美術室」では、訪れた女性たちの

弾む声が聞こえます。大きな黒板の行事予定表や、温もりのある木枠の窓などが、かつてここが阿下喜小学校の職員室だったことを物語ります。校舎の竣工は昭和12(1937)年ですが、同56

「きっかけは、マルシェに遊びに来たことですね」と話すのは、和服姿が板に付いている帖佐真之介さん。お話のマルシェとは、平成25年から昨年にかけて10月に開催されていた「阿下喜 秋ノ市(旧称「阿下喜マルシェ・クラフト市」の

こと。「桐林館」前のグラウンドや商店街全体が会場となり、有機野菜などの食品や、手作りの籠などのクラフト製品を扱う数十店が出店しました。

昔ながらの商店街のたたずまいを残す阿下喜に、帖佐さんが大きな可能性と魅力を感じた、ちょうどそのころ、同館が国登録有形文化財となり、市や地域住民たちの間では、さらなる有効活用法を模索中でした。地域の象徴としてふさわしい、皆が集えるサロンの

ような交流スペースを館内に作ることに決定した時、自らがその担い手になるかと決断し、市外から移住してきたと語ってくれました。

オープン以来、「桐林館 阿下喜美術室」には卒業生たちも訪れ「校舎は昔は3棟もあったんだよ」などと、昔話に花が咲くことがあるほか、木造校舎のたたずまいに引かれて、関東や大阪方面などから足を運ぶ若い人もいますといいます。世代や地域も超えた人々との交



帖佐 真之介さん(中央)、  
仲間の水谷 真人さん(左)と打田 浩孝さん(右)



大勢の人々で賑わう「阿下喜 秋ノ市」※



林 伸也(紫光窯)さんの作品

流が楽しいと語る帖佐さんは、これまでに、市内藤原町の紫光窯で制作を続ける林伸也さんの作品をはじめとして、月替わりで、地域内外の作家たちの作品を展示したり、音楽ライブや子どもたちによる能の発表会などを企画・開催してきました。そして現在は、新たな試みが始動中です。「タイムレター」と名付けられた企画で、1年から10年の期間を設定して、たとえば1年後の自分、3年後のパートナー、10年後の子どもなど、未来の誰かに宛てて書いた手紙を届けるサービス。じっくりと腰を落ち着けて、未来に想いを馳せてもらおうというのです。

## お問い合わせ

桐林館 阿下喜美術室(月・火曜日休館)  
TEL 0594-17216096

※印の写真は取材先から提供していただきました



山里にこだまする、カリヨンの音と子どもたちの歓声

# 波瀬ゆり館

(旧波瀬小学校校舎)

【松阪市飯高町】



「波瀬ゆり館」中庭にテントを張る子どもたち。※

アマゴやアユなど多種多様な生物を  
はぐくむ柳田川、八角銅鐘(県指定重要  
文化財)で名高い泰運寺、古くから自生  
するヤマユリの「波瀬ゆり」…。

かつて、和歌山街道の宿場町として  
栄えた飯高町波瀬には、地域の人々が  
自慢できるものが数多くあります。平

成3年に建てられた旧波瀬小学校の校  
舎もその一つ。地元産スギやヒノキを  
ふんだんに使用した、純木造校舎です。  
そんな自慢の学校が、同20年に休校と  
なった時、地域の人々で結成した「波瀬  
むらづくり協議会」の皆さんが考えたの  
が、体験学習の場所として活用するこ

ています。自由に遊ぶこともままなら  
ない子どもたちが、豊かな波瀬の自然  
と人々の思いやりに触れたことは、か  
げがえのない体験となったことでしょ  
う。

「私たちが活動の中心としているのは  
〓人の寄る村づくりです」と話すのは、  
同協議会副会長の向東克己さん。傍ら  
では副会長の大西敏一さん、波瀬ゆり  
館部長の増田進一さん、事務局長の寺



川遊び体験で、アマゴつかみ捕りに興じる子どもたち。※



後方向かって左から  
大西 敏一さん、向東 克己さん、寺脇 充さん、増田 進一さん。  
前方「波瀬むらづくり協議会」里グループの皆さん。



「波瀬むらづくり  
協議会」会長の  
福本 博行さん

一杯もてな  
すのです。  
皆さんの  
お話を伺っ  
ている最中、  
どこからか、  
「キンコー  
ン、カンコー  
ン」と澄ん  
だ音色が響  
いてきました。  
た。これも  
皆さんの自  
慢の一つ。  
同館に据え  
られた小さ  
な鐘塔には、

とでした。「自然、人、歴史、全ての生  
きとし生けるものの『生きる』を学ぶ」を  
テーマとした1泊2日のプログラムを  
各種用意し、毎年12から15団体、約1  
200人の子どもたちを受入れていま  
す。また、東日本大震災以降は、福島  
の子どもたちが4泊5日の日程で訪問。  
本年度7回目を迎えます。

山里の木々が芽吹き始めた3月4日、  
「波瀬ゆり館」(旧波瀬小学校校舎)を訪  
ねると、廊下に貼られた手紙が目に残  
まりました。そこには、過去に行われ  
た「福島松阪サマーキャンプ in 波瀬」  
に参加した子どもたちが星空観察した  
こと、柳田川で遊んだこと、アマゴや  
ウナギを捕まえた時に思わず「やっ  
たー!」と叫んだこと、そして、焼いて  
もらった魚を食べると「ほっぺたが落ち  
るほどおいしかった」ことなどが丁寧な  
文字で書いてありました。また、「みんな  
が優しくしてくれましたこと、ぼくも  
優しくなれている気がします」などと、  
波瀬の人々への感謝の気持ちも綴られ



鐘塔とカリヨン

オランダ製カリヨン4個が吊るされ、  
12時・15時・17時に音が鳴る仕組みです。  
カリヨンとは、打楽器の一種で、音の  
高さを異にする一組の鐘を配列したも  
の。その音色は放送で流れるものとは  
違い、優しく、耳に心地よく響きま  
した。

やがて、季節は「波瀬ゆり」の可憐な花  
が咲く7月を迎えます。この夏も「波瀬  
ゆり館」には、子どもたちの歓声が響き  
渡ることでしょう。

## お問い合わせ

「波瀬むらづくり協議会」事務局  
(飯高地域振興局波瀬出張所内)  
TEL 0598-471-0321

※印の写真は取材先から提供していただきました



おいしい料理と楽しさで、何度も訪ねたくなる

# 「やなせ宿」 (名張市旧細川邸)

【名張市新町】



中庭に面した奥の間で談笑する皆さん。

花の便りが聞かれるころ、名張市市街地を通る初瀬街道を歩くと、随所で風情ある家屋や蔵などが見られました。江戸時代初期、藤堂高虎の養子である藤堂高吉がこの地に屋敷を構えて以

来、名張は商業の町として発展。名張藤堂家邸を取り囲む8つの町は、名張八宿と呼ばれて賑わったといえます。散策やサイクリングに好適な町並みをさらに進むと、つし2階の木造家屋

が目にとまりました。国登録有形文化財の旧細川邸です。江戸時代末期から明治初年に、薬商細川家(奈良県宇陀市)の支店として建てられました。袖卯達や虫籠窓などが、往時の町屋の雰囲気を与えています。この旧細川邸が、観光交流施設「やなせ宿」としてオープンしたのは、今から10年前のこと。以来、季節に応じて「新春餅つき大会」「名張八日戎祭り」「お雛様 in やなせ宿」「やなせ祭り」「隠街道市 in やなせ宿」など、年間50日以上のイベントが開催され、多くの来館者が訪れます。館長の池田毅さんの案内で館内へ入り、書道や連鶴教室などが行われる和室や土間を抜けると、中庭が現れまし



「やなせ宿」外観

た。想像以上に広さがあり、開放感があります。奥には、なまこ壁が印象的な中蔵と川蔵が建ち、前者は展示室として使われ、この日は連鶴教室の生徒さんたちの力作が並んでいました。また、後者は喫茶スペースとなっていて、ゆつくりと、落ち着いた時間を過ごせると好評を得ています。

さらに2棟の蔵の背後に回ると、光景は一変し、目の前に名張川が姿を現しました。池田さんは「以前は、もっと川幅が広くて、子ども

たちが川岸から飛び込んで遊んだものです」と、幼き日々を懐かしむように話してくれました。かつては蔵のすぐ近くを川が流れ、荷物を運ぶ船が横付けされていたのです。なお、古来から名張川はアユの名所として知られ、付近にはアユを捕るた



向かって左から館長の池田毅さん、スタッフの正木(まさき)由美子さん、金井弘子さん、池内雄治さん、事務局の榎本明雄さん。



「なばりこども食堂」※

めの築が設けられていたことや、宿場の賑わいを再び呼び戻す願いを込めて「やなせ宿」と命名されたことを教わりました。今でも、オイカワ(シラハエ)やカワムツ・タニシなどが生息する名張川を眺めた後、再び中庭へ戻ると、厨房やカウンター席が備わった物産棟に気が付きました。ここは料理好きな人や学生、飲食店の開業をめざす人たちが日替わりシェフとなり、ランチを提供するワ

ンデイレストランです。休館日の月曜日以外は開業し、その種類も和食・イタリアン・インドネシア料理など多多彩。毎日来訪しても異なる料理が楽しめる」と評判を呼んでいます。また、月に1度は18歳以下の子どもは無料という「なばりこども食堂」もあると伺いました。この日は、スタッフの一員でもあるシェフの池内雄治さんが、丹精込めて打った、ざるそばと蒸し寿司をいただきます。いつ訪れても、おいしい料理があつて、楽しいイベントや教室が行われている「やなせ宿」に、一度足を運んでみてはいかがでしょうか。池内 雄治さん



ざるそばの準備をする池内 雄治さん

## お問い合わせ

「やなせ宿」月曜日休館

TEL 0595-162-7760

※印の写真は取材先から提供していただきました



# 鳥羽大庄屋かどや (旧廣野家住宅) [鳥羽市鳥羽]



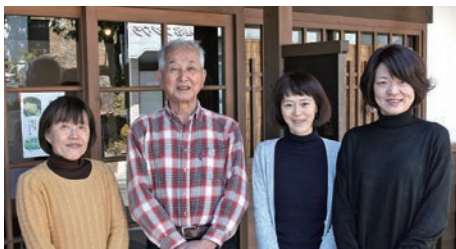
「かどやお針子倶楽部」で着物をリメイクしたストール作りに専念する皆さん。

風雲急を告げる戦国時代、戦国最強の水軍大将として名を馳せた武将がいました。九鬼嘉隆です。嘉隆が礎を築いた鳥羽城下の一面に、江戸時代に大庄屋を務めた廣野家がありました。

当主は代々「藤右衛門」を襲名し、城内には専用の間が設けられていたと伝わります。江戸時代後期になり、6代目が「三徳堂葉舗を創業、明治時代以降は、8代目が「括囊舎」の名前で営業するな

んでいると思います」と、笑顔で語ってくれました。

廣野さんのお話通り、コンサートなどのイベント、手芸などの教室に加えて、夏休み期間中には、朝早くから子どもたちの勉強の場「寺子屋」として開放するなど、常に人々が集う施設内では、この日は、伊勢市の人形作家・阿部夫美子さんの和紙人形展が開催されました。「日本神話の世界」のテーマ通り、天照大神をはじめとした神々を表現した人形たちは、いずれも優美で神秘的。



向かって左から廣野 克子さん、清水 久行さん、久保田 結子(ゆうこ)さん、森 真央さん。



和紙人形展「日本神話の世界」展示風景



「長尾オルガン」

和室に展示されているため、間近にじっくり見ることができました。赤や青などの色ガラスがスタンドグラスのようにはめ込まれた窓や、さまざまな意匠を施した欄間など、建物全体が文化財としての価値を有する同施設では、所有していた山田羽書(日本最古の紙幣)や薬屋を営むために使用した道具類なども展示されています。その中でも珍しいのは「長尾オルガン」でしょう。現松阪市の楽器職人、故長尾芳蔵氏が明治時代に制作した国産オル

ど、鳥羽随一の資産家として知られる存在でした。時は流れ、江戸時代後期から明治時代にかけて建てられた廣野家の母屋や蔵は、平成18年に国の登録有形文化財となりました。その後、修復工事を経て、薬店経営時の様子が再現され、観光・市民交流施設「鳥羽大庄屋かどや」として蘇りました。



「鳥羽大庄屋かどや」外観

ガンのことで、鍵盤の数が39しかないため、「ベビーオルガン」の愛称で親しまれています。現在、国内では3台しか現存しないことから、市の文化財に指定されています。施設内では、この「長尾オルガン」を使った「昼下がりコンサート」なども随時開催され、その音色を楽しむことができます。

「鳥羽大庄屋かどや」の存在は1つの点ですが、点が線となり、さらに線が面となって、広がっていくことが私たちの願いです」と話す清水さん。その言葉通り、同施設の誕生をきっかけとして、市内旧市街地の商店主たちが「鳥羽なかまち会」を結成。定期的に「なかまちマーケット」を開催するなど、新たな活動が始まっています。「鳥羽大庄屋かどや」を中心とした交流と地域活性化の輪は、着実に大きく広がっていくことでしょう。

### お問い合わせ

鳥羽大庄屋かどや(火曜日休館)  
TEL 0599-1251-8686



40年以上の時を経て、国内外の訪問客をもてなす

# 魚まちのたまり場

(旧(旧)食堂) 〔北牟婁郡紀北町〕



向かって左手前から長井 好子さん、喜田(きだ) ちや子さん、大西 光子さん、堀内 久子さん、湊 章男さん、植田 芳男さん。

地域活性化に向けてのさまざまな試みが実施されています。平成25年に散策の休憩所兼交流スペースとして開館した、まちかど博物館「魚まちのたまり場」もその一つ。ここは、40年以上前に閉店した「(旧)食堂」。管理・運営するのは、町の魅力を発信したり、訪問者を温かく案内するなどの活動を続ける「古道魚まち歩観会」の皆さんです。

ある日のこと、会長の植田 芳男さんの案内で同館を訪ねると、予想以上に奥行きがありました。壁側には、ホー



昔懐かしい看板や道具類などが並ぶ「魚まちのたまり場」内部



「かんからこぼし座」上映会 ※

て、地域の皆さんも集まってきてくれました。すると「懐かしいねえ」ここで食べたぜんざいはおいしかったね」「この2階でお見合いをした人もいたよ」などと、数十年の時を超えた思い出話に花が

ロー製の看板や黒電話、古時計などが展示され、昭和の雰囲気を感じられます。和室では、「かんからこぼしと治郎左衛門」に加えて、「まんぼうと殿様」「たかぼっさん」などの昔話を影絵で紹介する「かんからこぼし座」の上映会なども行われます。



「古道魚まち歩観会」会長の植田 芳男さん

この日は、湊章男さんをはじめとして、地域の皆さんも集まってきてくれました。すると「懐かしいねえ」ここで食べたぜんざいはおいしかったね」「この2階でお見合いをした人もいたよ」などと、数十年の時を超えた思い出話に花が

東紀州の玄関口、紀北町の長島港に沿って続く旧魚市場周辺の町並みは、通称「魚まち」といいます。潮風に誘われて町を歩けば、軒先に1年中掲げられた注連飾りや、あえくと呼ばれる路地の途中で、老舗の蒲鉾屋や庚申堂を見かけるなど、独特の景観が楽しめます。また、ここでは海や川にまつわる昔話が語り継がれていますが、中でも390年以上続く旧家の湊家では、かんからこぼし(河童)にまつわる伝説が今に息づきます。伝説とは、初代当主の湊治郎左衛門が、かんからこぼしを懲らしめたことから、一族は決して水難に遭わないという話。以来、1月11日には、同家の当主と地域で生まれたばかりの男児との間で、親子の杯を交わす風習「息子の酒」が受け継がれ、現当主、13代目の章男さんも、毎年約10人と杯を交わしているといっています。

近年、魚まち界限では、閉店していた青果店をお年寄りたちの交流施設「ふらーりフラット」として蘇らせるなど、

咲きました。ここは、昭和初期から同45(1970)年ごろまで、寿司・うどんなどに加えて、季節に応じてかき氷やぜんざいが食べられるなど、地域の人々に愛された食堂だったのです。また、さらに遡れば、大正4(1915)年に建てられた当初は公衆浴場だったといえます。当時の様子は、トタン板が張られた天井が吹き抜けのようになっていることなどから、ある程度、想像することができました。

同会では、近年、台湾やオーストラリアなど、海外からの訪問客を案内する機会が増えたといえます。館内では「Thank you」「kindness」などと、感謝を伝える言葉が寄せ書きされた色紙を見ることもできました。昔ながらの町並みや連綿と続く風習を大切に守り続けてきた町の人々の想いは、今後も国境を超えて届くことでしょう。

## お問い合わせ

紀北町観光協会  
TEL 0597-46-3555

※印の写真は取材先から提供していただきました



# 三重県シエアリングネイチャー協会

平成9年、社団法人「日本ネイチャーゲーム協会」設立に続いて、同11年に「三重県ネイチャーゲーム協会」を結成。その後、同25年に公益社団法人「日本シエアリングネイチャー協会」と名称を改めたことを受け、「三重県シエアリングネイチャー協会」となりました。現在、約100名の会員が連携して、ネイチャーゲームの普及とシエアリングネイチャーの理念の実現に向けて活動しています。年に1度、リーダー養成講座も実施しています。



櫻木 善仁理事長

## お問い合わせ

「三重県シエアリング  
ネイチャー協会」事務局  
亀山市安坂山町1758-4  
TEL 090-3151-9725  
<http://www.geocities.jp/sngmie/>

三重県内で活動するグループを紹介する「いま、グループネット」。今回は「三重県シエアリングネイチャー協会」をご紹介します。この日は、理事長の櫻木善仁さんにお話を伺いました。

——まず、「シエアリングネイチャー」について教えてください。

櫻木：昭和54（1979）年アメリカのナチュラリストであるジョセフ・コーネル氏が『Sharing Nature With Children』で発表した活動のことで、野外でのゲーム（ネイチャーゲーム）を通じて、自然への認識を深めることを目標にしています。こ

こで大切なのは、さまざまな感覚を使って自然を直接体験し、自然への共感をはぐくむということ、人と自然を分かち合う（シエアリング）という考え方です。

——単純に自然を楽しもうという考えではないのですか。

櫻木：そうです。その深い理念が共感を呼び、現在、書籍は世界18か国語に翻訳されています。日本でも、同61（1986）年に『ネイチャーゲーム』というタイトルで日本語版が発行されると、普及活動が活発化し、平成5年に任意団体「日本ネイチャーゲーム協会」が設立されました。その後、同協会は社団法人となり、さらに、公益社団法人「日本シエ

リング」など、少し広い場所があればできるゲームもあり、現在、その種類は、160以上あります。

——なるほど。大人も子どもも手軽に楽しめそうですね。

櫻木：そうです。今では、年間20校ほどの小学校や幼稚園、さらには老人福祉施設などにもお邪魔して、指導しています。子どもたちは、普段見慣れているはずの校庭に、知らない木の実などが落ちていることにすぐ興味を持ってくれます。また、ゲーム後に「どう感

じたか」を振り返ることで、人は自分とは違うということを理解する機会にもなっています。

——毎年開催している「わくわく自然体験活動」も大変な人気だと伺いました。

櫻木：小学3・4年生を対象に行っている、1泊2日の「わくわく自然体験活動」は「四日市・いなべ地域の会」が中心となって開催しています。毎回、募集人員の3倍以上の申込みがあるほどです。

例年は夏と秋の開催ですが、昨年2

アリングネイチャー協会」と名称を改め、人が自然を尊重し共生していく社会を創造することを目的にしています。

——具体的には、どこでどんなことをするのですか？

櫻木：海・山・川など、自然豊かな三重県では、さまざまなネイチャーゲームが可能ですが、実は、多くのものは、公園や小学校の校庭などでも行うことができます。たとえば校庭などでよく行う「森の色あわせ」は、自然の中にある、さまざまな色を探すというもので、四季を通じて実施できます。また、ある生物の特徴を数枚の紙に分けて記入しておいて、それらを集めると、一つの生物が完成するという「動物ヒントリ

月に「冬のわくわく自然体験活動」を実施したところ、大変好評でした。子どもたちは、材料を入れたアルミ缶を雪の中で転がしてアイスクリームを作ったり、雪の上に倒れ込んだ跡を見て「このぬけ跡だあれ」というネイチャーゲームなどを元気にやってくれました。今後、このような活動を継続する予定です。

——ありがとうございます。櫻木さんのお話で、ネイチャーゲームの楽しさと奥深さを知ることができました。

インタビュー…中村真由美



ネイチャーゲーム「森の色あわせ」※



ネイチャーゲーム「動物ヒントリレー」※



「冬のわくわく自然体験活動」※



各「わくわく自然体験活動」の活動報告書

※印の写真は取材先から提供していただきました





国宝の御堂が並び建つ

高田本山さんと  
一身田寺内町を歩く

# 津市

## 一身田町

津市一身田町には、真宗高田派本山の専修寺を中心に、末寺や風情ある町並みが続く一画があり、一身田寺内町と呼ばれます。寺内町とは、15世紀の終りごろから16世紀の中ごろにかけて、真宗の寺院を中心としてつくられた自治都市のこと。周囲には環濠が巡らされているなど、一般的な門前町とは趣が異なります。

今回は、昨年に御影堂と如来堂が国宝に指定された専修寺と、一身田寺内町を歩きます。取材・文：中村真由美

今が見頃

高田本山専修寺のハス  
6月下旬から8月上旬ごろ、専修寺境内には、ピンク色や白ク色や白など、優美なハスの花々が咲き誇ります。



今回の案内人は「一身田寺内町ほっとガイド会」の岡本 靖弘さん。伊勢木綿の半纏(はんてん)を着て、穏やかな語り口で丁寧に話す姿は、訪問者を和ませてくれます。

### 日本で唯一、完全な形を残す環濠

今回の散策は、JR「一身田」駅から始まります。駅舎を後にして東へ数分進むと、幅1メートルほどの濠が見えてきました。「これが環濠です。以前は幅が3間(約5メートル)あり、土手が築かれていました」と教わります。

一身田寺内町の特徴の一つが、周囲を巡る環濠です。規模は東西約500メートル、南北約450メートル。お話し通り、その幅は変わりましたが、日本で唯一、完全な形で残る環濠として



毛無川の流れを利用した環濠



唐門



如来堂



御影堂

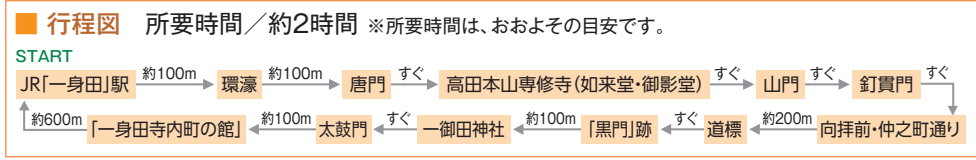
知られています。かつては出入口は3か所だけで、それぞれに橋が架けられていました。橋の内側には門が建ち、暮れ六つ(午後6時)から、翌朝の明け六つ(午前6時)までは閉じて、通行を禁じていました。環濠は、防御の役割も果たしていたのです。

「安楽橋」のすぐ南側には、京都方面への西の出入口である「桜門」がありました。したが、今回は、カラー舗装された道路をそのまま東へと進みます。すると、左手に大きな門が現れました。専修寺の唐門(国指定重要文化財)です。扉に

施された見事な彫刻などが、格式の高さを物語ります。この門は、勅使(天皇の意思である勅旨)を伝える勅使が通る門)でした。

### 国宝の如来堂と御影堂

現在は、一般に開放されている唐門をくぐると、目の前に現れるのが、阿彌陀如来立像を本尊とする如来堂です。東隣には、御影(開山・親鸞聖人の坐像、歴代上人の画像を安置する御影堂)が並び建ちます。荘厳な造りの両堂は、昨秋、三重県内の建造物で初めて国宝に指定







山門



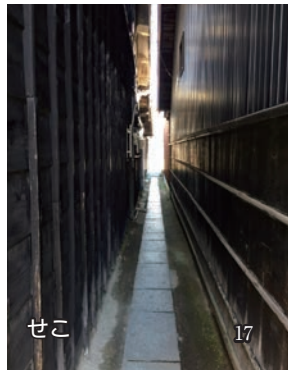
釘貫門



仲之町通り



道標



せこ

されました。およそ3万坪の広大な境内には、ほかにも親鸞聖人の御廟や鐘楼などが建つほか、県指定史跡・名勝の庭園「雲幽園」や宝物館などが揃います。

人々が、敬愛の気持ちを含めて、高田本山さんと呼ぶ高田本山専修寺の歴史は、寛正5(1464)年に遡ります。十世真慧上人が、東海・北陸地方の布教活動の中心として建立した無量寿院が前身です。その後、現在の栃木県の高田にあった高田山専修寺が戦火にのみまわれたことで、ここが真宗高田派の中

心となったのです。

見どころが多い専修寺を後にして、御影堂前の山門(国指定重要文化財)をくぐると、すぐ南側に見えるのが釘貫門です。この門を境に寺内(寺領)と町家がある地下に分かれていました。人々が、門の外から御影堂に向かつて拜んでいたことから、その名が付いたという向拝前から東へ延びる通りは、途中から仲之町通りと名称を変え、さらに続きます。通りの両側には、和菓子屋・荒物屋・衣料品店などが軒を連ね、

「まちかど博物館」として公開している店舗もありました。

### 「一身田寺内町の館」でほっと一息

仲之町通りで「せこ」と呼ばれる細い路地などに郷愁を覚えながら歩いていくと、三叉路に立つ道標に気が付きました。3方向に街道名が刻まれ「右江戸戸みち」「左御堂并京道」「右さんくう道」と読み取れます。この中で「御堂」は専修寺の御影堂のこと、そして「さんく

う道」は、伊勢神宮へと向かう街道のことだと教わります。津市の江戸橋から、関宿(亀山市関町)の東の追分にいたるまでの「伊勢別街道」が、町の近くを通っていたのです。

道標のすぐ南には、3か所の門の一つである「黒門」がありました。街道を行く多くの人々が、専修寺参詣のために、この門から出入りしたことでしょう。橋の南側に広がる橋向には、芝居小屋や茶屋などが建ち並んでいたといえます。

「一身田寺内町の歴史を知るには、一身田神社の存在も欠かせません」との案内で、「黒門」跡から北へ向かいます。同社は、一身田寺内町が形成される以前からある神社で、古い棟札などが残ります。その中で、天正20(1592)年の棟札に「寺内」の文字があることから、このころにはすでに町が形成されていたことがわかります。

一身田神社に手を合わせた後は、再び方向を変え、以前は、町の人々に太

鼓で時を知らせていたという専修寺の太鼓門(国指定重要文化財)を眺めながら、南へと歩きます。すると、広い通りへ出ました。板塀や長屋門など、今も伝統的な景観が残る寺町通りです。この風情ある景観の一面にたたずむのが「一身田寺内町の館」です。館内には、写真パネルや復元模型などが展示されているほか、休憩スペースもあります。散策の途中で、ほっと一息つくのもいいでしょう。

専修寺と一身田寺内町の散策は、寺

町通りを西へと進み、JR「一身田」駅で終了ですが、駅舎を越えて北西へ数分歩くと、「伊勢別街道」沿いに建つ、高さ約8.6メートルの窪田の常夜燈を見ることが出来ます。なお、専修寺境内の詳細な案内を希望する場合は、専修寺進納所(TEL 059・236・5701)までお問い合わせください。

#### 問「一身田寺内町ほっとガイド会」

(一身田寺内町の館)月曜日休館)

TEL 059・233・6666



一御田神社



太鼓門



「一身田寺内町の館」

※印の写真は取材先から提供していただきました



# 三重 の シンボル

伊賀市

三重県内の市町などが、それぞれの特徴を象徴する存在として選定している木・花を紹介します。



市の木  
アカマツ



市の花  
ササユリ

■ お問い合わせ ■

伊賀市役所企画振興部総合政策課 TEL 0595-22-9620

\*ご愛読いただいていた「三重彩時記」を202号からリニューアルしました。

\*市・町名の50音順に紹介しています。

\*シンボルを選定していない、もしくは鳥や魚などを選定している市町も一部あります。

表紙写真 波瀬ゆり館(旧波瀬小学校校舎)(松阪市飯高町)

百五銀行 丸之内本部棟内の「歴史資料館」で、「すばらしき“みえ”」のバックナンバーをご覧くださいませ。  
☎ 経営企画部広報CSR課 TEL 059-223-2326(要予約)